



第1会場●2F 第4研修室

■司 会／椋本 博志 長崎県教育庁生涯学習課 社会教育推進班 指導主事
宮原 孝子 佐賀県文化・スポーツ部 まなび課 主査

分科会の進め方 13:30~13:35

1 「おのみち100km徒歩の旅」
～意義と役割とサポートシステムの再検証～ 13:35~14:05

柿本 和彦 (広島県尾道市) NPOおのみち寺子屋 理事長
岩永 奈々ほか(広島県尾道市) NPOおのみち寺子屋 会員

平成15年(社)尾道青年会議所が創始した小学生を対象とした5日間の超ハードな体験プログラム。その後実行委員会形式を取り入れて現在に至る。主たる目的は子どもの自己鍛錬と集団における人間関係の構築である。本事業の成否は支援するボランティアおよびそのリーダーの気力、意欲、知識、体験にかかっており、彼らの養成研修の視点と方法が最も重要である。リーダー養成は計12回、フォローアップ研修は計4回、ボランティア研修生の養成研修は計5回などを積み上げていくが、年間を通して「プレリーダー研修」(計5回)「おの100 支援塾」(計3回)などを実施している。学生ボランティアの「社会人基礎力」の向上、子ども達の耐性・協調性の向上など成果は著しい。企業協賛金、参加費、研修登録料などを含め、総事業費は350万円程度である。

2 第1回「協育」見本市の思想と道筋 14:10~14:40

安達美和子(大分県別府市) NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット 事務局長

地域の教育を「協働」で創り上げようとする時、学習の希望と教育の必要をどのように組み合わせるかが中心課題になる。「協育」見本市は、地域に現存する教育資源と人々の教育的需要と供給を具体的に「マッチング」する場と機会と意味付けを同時に達成しようとする実験的な試みである。子どもの育ちや地域の発展のためには、多様な人々と多角的な発想が不可欠であると考え、県内の団体・機関、グループ・サークル、企業など地域の教育資源となりうる対象に呼び掛け、将来の活動に資するネットワーク化を進めることを目的とした。手法は「見本市」の形態を採り、出店協力者21団体の展示、実演、「協育コーナー」の事例紹介28事業にシンポジウムを組み合わせ提供した。また、県立社会教育総合センターの「おおいた学びフェスタ」との同日・同会場での開催は広報や参加者確保の点で大きな相乗効果を生み出した。「見本市」の最大課題は「何を提供し」、「何と何を繋ぎ」、「今後どう生かそうとするのか」を明確に提案することだと思っている。

ティータイム 14:40~15:05

3 過疎地における子育て支援システムの崩壊と再組織・再構築の過程 15:05~15:35

柳澤 裕実(山口県周防大島町) 三蒲地域子育てネット 会長

過疎化、少子化、共同体文化の衰退が進行する中で、地域における子育て支援プログラムを担当する引き受け手が途絶え、事実上、運営システムが崩壊した。自己都合優先の生き方が浸透し、地域共同体が内部崩壊すれば、「地域ぐるみの子育て」はもはや成り立たない。対象地域にはまだ30名の小学生が在学し、放課後の支援プログラムの必要性も変わらない。発表者はガールスカウト活動の経験を生かし、地域民生委員会の協力を得て、地域組織活動育成事業として地域の高齢者人材を中核とした子育て支援システムの再組織化とプログラムの再構築に挑戦しているが、その過程は地域社会の空洞化との戦いであり、「学校、家庭、地域の連携」などというスローガンは過疎地においてほとんど機能しない実態との闘いである。

4 朗読と音楽で物語を紡ぐ「わくわくお話し隊」の軌跡
～「輝く大人であり続けよう」をモットーに～ 15:40~16:10

小川 真里(島根県雲南市) 「わくわくお話し隊」 代表

平成15年、活動は雲南市掛合町の公民館の呼び掛けから始まった。手がけたのは絵本の読み語りボランティア。「群読読み聞かせ」や「朗読劇」の試行錯誤を続け、平成18年に多様な生活背景を持つ10名で「わくわくお話し隊」を結成、モットーを「輝く大人であり続けよう」とした。全員アマチュアであるが、脚本、演出、朗読、ピアノやチェロや太鼓の演奏などを「自分たち流」にアレンジして「伝えたいテーマ」を選定している。これまでの上演経験は幼保園、小中学校、老健施設、各種公私の式典などがあり、プログラムは「つるのおんがえし」からオリジナルの作品まで活動の積み重ねでレパートリーは豊富になった。